
blue sky

SugarChain

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

blue sky

【Nコード】

N0891E

【作者名】

SugarChain

【あらすじ】

ずっと君を探してた。幾度転生しても、君だけを探していた。大切な君。いなくなってしまった君。

プロローグ（前書き）

著作権の放棄はしていませんのでご注意ください。

ブローグ

この想いはいつか空へ帰るのだろうか？

遠い遠い小さな惑星で咲いた花のような、小さな小さな恋心。

ほんのりと優しい桜色に染まって。

ある日消えてしまった。

そして僕は君を探し続ける。

だって、ずっと君を忘れられないから。

君を探しながら、

君を求めながら。

僕は何度生まれ変わっただろう。

それでも君を諦めない。

諦めることなんて出来ない。

再会（前書き）

著作権は放棄していませんのでご注意ください。

再会

「見つけた。」

淡いピンクの花びらが舞い散る中、やっと見つけた。

ずっと探していた君。

髪の色も。

肌の色も。

瞳の色さえ変わってしまったけれど。

全てを包み込む清らかな水のような雰囲気。

それだけは変わらない。

「おいっ、和葉^{カズハ}、あの子めっちゃ可愛くね？」

俺、声かけてこよっかな？」

高校からの友人の晶^{アキラ}が指さした先には「君」がいた。

「そうだな。あの子も新入生っぽいし。誘って皆でカフェテリアでも行くか？」

「やった〜っ、珍しいな、和葉が許してくれるとは思わなかったぜ。」

晶の返事について苦笑してしまった。

俺の許可なんてなくても言い出したら聞かないくせに。

喜びながら「君」へと近づく晶を追うように「君」へと近づく。

ああ、ちよつと困った顔してるなあ（苦笑）。

「こんにちは。ごめんね、こいつが急に。」

君も新人生だよな？

俺は和葉。で、こっちの軽そうなのが明。

今からカフェテリア行こうかって話してたんだ。

良かったら君も行かない？」

「お誘いありがとう。」

私は雪。^{ユキ}

和葉さんと晶くんね、よろしく。」

につこりと柔らかな笑顔は変わっていない。

一体どのくらい経ったのだろう。

「君」がいなくなってから、ずっと探し続けていた。

魂までも変わってしまっていたらと不安だった。

だが、それは杞憂だったようだ。

発案（前書き）

著作権は放棄していませんのでご注意ください。

発案

「海行きた〜いつ。」

べしゃつと音がしそうな勢いでテーブルに顔を伏せた君。

さらさらと髪が落ちる。

「海???なんで?まだ寒いじゃん?」

「だって〜、去年は勉強してて行けなかったんだもん。」

大学に入ったら友達と行きたいって思ってたの!」

そっか〜、なんて納得しつつも晶は行く気がないらしい。

コイツにとっては水着の女の子がいない海は海として認められないらしい。

ちよつとガツカリしている雪に、いつ行く?って聞いたら嬉しそうな笑顔が返ってきた。

「今度の土曜日!」

「分かった。晶も土曜空いてるよな。」

さっきまでは乗り気じゃなかった様子の晶も、もちろん!なんて元気に返事してる。

俺が知っていた「君」は「慈愛」という言葉がぴったりで。

それでいて大抵は悲しそうな顔をしていた。

今生きている世界とは違って「平和」という言葉とは程遠いところだったから。

全身で嬉しいとか、がっかりとか、そういう感情を表現しているような「雪」は「君」とはまるで別人のようだけれど。

それでも俺は「雪」になった「君」を見つけ出した。

「君」の笑顔がもっと見たい。

俺はわがままだろうか。

でも、わがままでも「君」が笑顔になるならそれで良いと思ってしまっ

結局カフェテリアで二時間ほど雑談をした後、メールアドレスを交換し解散となった。

晶も俺も一人暮らしをこの春から始めたのだが、お互いのアパートは結構近かったりする。

帰り道、晶は雪と出会えて超ラッキー、神様ありがとう!!!なんて

言ってたけど。

俺も一緒になってふざけて神様ありがとう！って言ったら驚いた顔してたな。

「君」以外の女の子には興味なかっただけなのに、どうやら晶は俺のことを誤解していたらしい。

おおっ、とうとう和葉も女に興味を持ち始めたか！今日は赤飯だな！なんて失礼なことを言っていた。

海（前書き）

著作権は放棄しておりませんのでご注意ください。

海

雪と出会えて変わったこと。

俺の中にずっとあった孤独がなくなった。

ずっとずっと「君」に会いたかった。

何度転生しても「君」を忘れられなかった。

無駄だと思った時もあった。

でも、「君」にまた出会えた。

「雪」は「君」とはまるで別人だけど。

別人で良かったと思える事がたくさんある。

今の「君」が生きている世界が平和なこと。

今の「君」には両親がいること。

今の「君」は笑えること。

それは普通なのかもしれない。

でも、俺にとってはとても大きなこと。

「和葉とプーもおいでよ。」

波打ち際で雪と晶が遊んでいる。

雪が女一人で居ずらいかなと思って実家から車を借りるついでに犬も連れてきたのだが、そんな心配はいらなかったようだ。

雪は昔からの友達のように俺達に接する。

「プーは濡らすと母さんに怒られるからダメ。」

俺は何度庭の子ども用ビニールプールでプーを遊ばせて母さんに怒られたことが。

もう思い出せないくらいだ。

それにいくら今日が暖かいとはいえ、まだこの時期だと小型犬が全身濡れてしまったらすぐに乾かしないと風邪をひくだろう。

ちえっと言いながらも納得したのか雪がこっちにやってきた。

「プー、かわいいよね。何歳？」

「俺が中学に入った頃に家に来たから、、そろそろ7歳だな。」

ふん、そっかあなんて言いながらプーと遊び始める雪。

つつか、プーに遊ばれてないか？

「和葉、勝負だっ！」

振り向くと晶がいつの間にか波打ち際からこっちにやってきていた。

、、、、そのへんに落ちていたであろうボールを手にして。

プー（前書き）

著作権は放棄しておりませんのでご注意ください。

プー

いつも通りの晶のいたずらに付き合い、プーに下敷きにされていた雪も救出して帰路についた。

「晶、お前そろそろ落ち着けよ、ゝゝ。」

「えっ？なんで？？落ち着いてるじゃん、俺。」

ぶはつと噴き出す音が隣から聞こえる。

「雪、ゝゝ人のこと笑えないぞ？」

プーに遊ばれてただろう？」

「だって、プー可愛いんだもん。」

ていうか、プーって本当に7歳？

ペットショップで見かける生後三カ月くらいのトイプードルと同じ大きさなだけだ。」

「7歳だ。」

家に来た頃に病気ばかりしてたからな。

そのせいで小さいのかもしれないな。」

そう言ったら雪は「君」だった頃のように悲しそうな顔をした。

晶はプーの事で母さんが心を痛めていた事を知っているからか、何も言わない。

ごめんって、隣からかすかに聞こえた。

雪が気にすることじゃないのに。

俺も、つい、ごめんって言ってた。

腹減った、なんて言いながら晶がお腹を鳴らした。

マジかよ？

さっき、モスに寄って食べただろ？

そう言つと晶は、俺は燃費が違ふの！なんて偉そうに言つた。

雪と俺は苦笑するしか出来なかったけど。

苦笑でもいい。

雪が笑ってくれるなら。

雪は昔のことなんて覚えていない。

それでも、俺は雪の悲しそうな顔なんて見たくない。

ずっとずっと笑っていて欲しい。

だって「雪」は「君」だから。

そして「君」はいつも悲しそうだったから。

戦争（前書き）

著作権は放棄しておりませんのでご注意ください。

戦争

俺達が最初に出会ったのはどのくらい昔なんだろう？

それすらも分らないような遠い昔。

「君」と俺は出会った。

戦地から逃れるためのシャトルの中で。

「君」は不安そうな顔をしていたけれど。

それでも他の子供のように泣いたりはしていなかった。

次に出会ったのはエデンに移住してから。

「君」は穏やかな表情だった。

俺はそう思った。

誰と話するときも慈愛に満ちている表情。

柔らかな声。

きつと「君」は運命を受け入れたんだと思った。

そう錯覚するほどの笑顔だった。

でも。

ある夜「君」を見てしまった。

月明かりの中、ひっそりと涙を流す「君」を。

衝撃だった。

「君」は運命を受け入れていると思った。

他の泣きわめく子供達とは違うと思った。

戦災孤児仲間とは、昔聞いた聖母みたいだって言っていた。

そんな「君」が泣いていた。

俺は、その瞬間から君を好きになったんだと思う。

一段上の存在ではなく、自分と同じ生き物として。

尊敬すらした。

そして俺は「君」に近づいた。

「どうしたの？君は笑顔なのにまるで泣いているようだね。」

俺がそう言つと「君」は驚いた顔になったね。

それから俺達は戦争の事や親の事、友達のことなんかを話した。

そして俺は「君」が一人ぼっちになってしまった事、それでも他の戦災孤児の面倒を見るボランティアをしていることを知った。

「私には沢山の兄弟がいるのよ。

きつと今、この瞬間にも兄弟達は増えているんだわ。

だから泣いてなんかいられないの。

だって私が泣いてしまったら、兄弟達も泣いてしまうかもしれないでしょう？」

「君」は沢山の戦災孤児を「兄弟」と呼んでいた。

そして「兄弟」達のために君が笑っている事を俺は知った。

エデン（前書き）

著作権は放棄しておりませんのでご注意ください。

エデン

戦争を逃れて辿り着いたエデン。

「君」はそこで穏やかに暮らしていた。

「兄弟」達の面倒を見ながら。

戦争の爪痕は残っていたけれど。

それでも俺は「君」がこれから幸せになるんだと思っていた。

「ごめんね、あなた達を置いていってしまっわ。

本当はもっとずっと一緒にいられると思ったけど。

こんなに早くに母様達のところへ行けるなんて思ってたかった。

ありがとう。」

「君」はその言葉を最後にいなくなってしまった。

「君」だけじゃない。

エデンを病が襲っていた。

致死率90%の病は、エデンに住む子供達を天国へと送っていた。

子供だけが患う奇病。

エデンは戦争から逃げる事を許さなかった。

与えられた罰。

そうとしか考えられない病だった。

「和葉、お昼食べに行こうっ。」

驚いた。

気がつくと晶と雪が目の前にいた。

昔のことを思い出していた俺は、二人が来たことにも気付かなかったらしい。

「で、難しい顔して何考えてたんだ？」

「うーん、デートの誘い方かな？」

冗談が口をついて出た。

「「えっ!?!」」

晶はともかくとして、どうして雪まで驚くのか？

まあ、いつも俺が二人とつるんでるから女の子との出会いはないって思われているのかな。

「いかがですか？雪姫。

このわたくしめとデートして頂けませんか？」

冗談っぽく誘って、片手を差し出してみた。

「喜んで！」

って、、、、どうして晶が返事するんだ？？

まあ、雪が笑ってくれたからそれで良いけどな。

デート（前書き）

著作権は放棄しておりませんのでご注意ください。

デート

海に行ってから2週間経つが、俺達はこんな感じでなんとなく日々を過ごしている。

時折昔の事を思い出す俺。

大抵、晶か雪がやってきて現実に引き戻される。

俺は「君」を待っていたが、「君」が目の前にいるだけで、「君」が笑っているだけでそれ以上望む事はない。

「和葉、見て見て！

あの魚可愛い〜。」

「ん？どれ？

あの青いやつ？」

「うんっ。小さくてひらひらしてて可愛いっ。」

そう言う雪の方が可愛いと思ったけど、そんな事言ったら真っ赤になって叩くのでやめておく。

「雪の方が可愛いじゃん？」

晶、、自爆だな、なんて思っていると予想通り真っ赤になった雪に叩かれていた。

そう、結局デートに行くことになった。

晶と雪との3人で。

今回は晶が提案した水族館だ。

水の中にいるみたいで気持ち良いんだって昔言ってたのを聞いた事がある。

晶の水族館好きは変わっていないらしい。

俺もこの独特の青い空間が好きではあるが。

「なんか、喉渴いたな。

入口のところに自販機あったから後で寄ろうぜ。」

「おう。」

晶の誘いに俺も喉が渴いていることに気付く。

俺も意外と単純なのかもな。

心の中で苦笑しながら雪に目をやると。

雪は、高さ3メートルはあるであろう巨大な水槽に手をついて立つ

ていた。

青い光がさす中、まるで何かを祈っているかのように。

やっぱり「君」なんだな、と改めて思う。

思わず見つめてしまった。

「君」を見守りたい。

「君」を守りたい。

「君」が笑顔でいられるように。

「君」が悲しまないように。

でも。

「君」は「雪」になった。

何度転生したか分からないけど。

「雪」は「君」で、「君」は「雪」。

俺が守りたかった笑顔は「君」だけ。

それは生まれ変わっても同じだと思っていたけれど。

「雪」を「雪」として見れていない気がする。

「君」の面影を見つけてしまう。

「雪」の中に「君」を見つけると懐かしさでいっぱいになる。

これは良くない事かな？

「和葉っ、何ぼくとしてるの？

お腹空いた？」

気がつくと雪が目の前にいた。

君（前書き）

著作権は放棄しておりませんのでご注意ください。

君

「君」を見つけたせいか、以前よりぼつとする事が多くなった。

小さな事に「君」と「雪」の違いを発見する。

小さな事でエデンでの暮らしを思い出す。

「お前、最近ぼつとしてるよな」。

大学に入ってからって気を抜くんじゃないぞ？」

晶にまで言われた。

食欲と元気だけが取り柄みたいな晶に。

とはいえ、晶もある程度勉強が出来たから同じ大学に入ったわけであり、、、。

言い返す言葉がないな」と思いつつも、勉強疲れが今頃出たんだよ、と笑っておいた。

なら仕方ないな、と返されたけど、それでいいのか、、、。

そのまま晶は雪に友達を紹介してつと頼み込んでいる。

どうやら雪の友達にタイプの子がいたらしい。

いいよー、なんて雪は返事してるけど。

雪に気があると思っていたと後で晶に言ったら、馬に蹴られる気はねえよつと意味の分からない返事をしてきた。

「君」の柔らかな笑顔。

シャトルで出会った時は砂埃でパサパサになっていた髪。

ほんの少しの荷物。

エデンで再会した「君」は清流のように滑らかな髪を風に揺らして。

沢山の「兄弟」達と笑いあつて。

小さな「兄弟」が泣くと聖母のような笑顔で相手をしていたっけ。

「君」が見当たらない時は俺はいつもの大きな木の下に行く。

大抵は星の明るい晩だけど。

君は母星のある方を見つめて、誰にも見つからないようにひっそりと泣いていた。

俺が行くと慌てて泣いてないふりしてたけど。

でも俺はごまかされなかった。

一度、ほんの偶然で君の涙を見てしまったから。

だから「君」の姿が皆の前からなくなると俺は「君」を探した。

「君」にとって良かったのだろうか？

俺は「君」の気が紛れるなと思っていたけれど。

でも、「君」を見つけるのはいつも同じ場所。

「君」を俺が見つけるのを許してくれてると思っていた。

発病（前書き）

著作権は放棄しておりませんのでご注意ください。

発病

「君」の姿が見当たらないある朝。

いつもとは違うその行動に俺は焦った。

「君」が一人になるのは大抵母星が見える夜だったから。

朝はいつも「兄弟」達と一日の支度をしていたのに。

それに、エデンでは奇病が発生し始めていた。

母星から避難して来たのは健康な子供や戦争とは関係ない大人達。

なのに一部の子供がなぜか死んでいった。

最初は軽い熱が一週間ほど続き、その後2、3日で熱が高くなり死んでしまう。

感染経路は不明。

治療方法も見つからない。

発病するのは子供だけ。

「君」はいつもの木の下にはいなかった。

あちこち探したけど。

「君」を見つけたのは夕方になってから。

エデンの「森」と「砂漠」の境界にいた。

俺が見つけた時、「君」は「砂漠」の砂を掴んでは落とし、掴んでは落とし、、、。

もともと砂漠だったエデンを勝手に「森」に変えたから神様が怒ったのね、なんて言っていた。

「私も、発病したみたい。」

俺の目をまっすぐに見つめて、「君」は言った。

きつと俺が見つけるまでの間、ずっと一人で考えていたんだろう。

「兄弟」達の事、

病の事、

残りの時間をどうするか。

俺は何も言えず、ただ「君」をそっと抱きしめる事しかできなかった。

それは俺が、「君」を好きなんだと自覚した瞬間だった。

キュービッド（前書き）

著作権は放棄しておりませんのでご注意ください。

キュービッド

俺が「君」を好きだと自覚した5日後に君は死んでしまった。

何もしてあげられなかった。

「君」を守りたかったのに。

「君」に笑顔をあげたかったのに。

空気感染も接触感染もしない病は、どんなに俺が願っても俺に感染する事はなかった。

「君」も俺も微妙な年齢だったのだろう。

そして「君」は感染し、俺は感染しなかった。

「和葉、ダブルデートしようぜっ。」

「は??? つつか誰とするのさ?」

「和葉と雪だろ、で、俺と早苗さなえちゃん」

「なんだ、うまくいったのか。」

良かったな。

お前、意外と奥手なところあるからな。」

まだ連絡先交換しただけだよ、だから頼む！なんて言われたら断れないのが俺。

「じゃあ、一応雪に聞いてみるけど。」

雪と付き合ってるわけじゃないから断られたら諦めるよ？」

「頼む！恩にきるぜ。」

満面の笑顔で晶は次の講義に向っていった。

俺も雪も次の時間は講義がない。

手短に用件だけをメールで送る。

すぐに返信があり、見るとイマドコ？の文字。

カフェテリア、とだけ返すとスグイクとの返信。

のんびりコーヒーを飲んでいると、雪がホットココアを手にとってきた。

「で、何？ダブルデートって。」

早苗と晶、うまくいつてるの？」

にこにこしながら聞いてくる。

どうやらダブルデートという言葉には抵抗がないようだ。

「まだ連絡先交換しただけらしい。」

晶のやつ、あれで意外と奥手だからダブルデートに誘うのが精一杯みたいなんだ。

で、雪が嫌じゃなければ4人でどこか行かないか？」

「うんつ。わーい、キューピッドだ

どこに行こうか？」

楽しみだね」

「晶はどこでも喜ぶから、早苗ちゃんに行きたいところ聞いてみて貰えるか？」

「オッケー。」

次の講義、早苗と一緒にだから聞いておくね。」

よろしく、と返事をし、その後は雑談に変わった。

夏にはバーベキューがしたいとか、花火がしたいとか。

しかもメンバーがダブルデートの4人。

晶が振られるとは考えてもいないようだ。

最終話（前書き）

著作権は放棄しておりませんのでご注意ください。

最終話

早苗ちゃんの提案で俺達は遊園地に来た。

「五月とはいえ、もう暑いね。」

「そうだな。」

つつか、この日差しの中二時間も並ぶなんて普通しないぞ?。」

えゝっ、だってコレ乗りたかったんだもん、なんて言いながら雪が笑う。

日差しと生い茂る緑。

昔の「君」の笑顔と重なる。

「何か飲み物買ってくるよ。」

何がいい?。」

「ウーロン茶!。」

「あたしはオレンジジュース!。」

笑顔で答える雪と早苗ちゃんをその場に残し、晶を連れて売店へ向かう。

今回は俺が払う、と晶が言ったので甘えることにした。

そもそもは晶と早苗ちゃんのために来たんだし。

俺は自分の分にアイスコーヒーを、晶はコーラを買って二人のころへ戻った。

「おかえり〜。ありがとうっ。」

「君」と同じ笑顔で笑う雪。

オカエリ、がどうしようもなく懐かしい。

エデンにいた頃も「君」はオカエリ、と言ってくれた。

懐かしさのあまり、つい空を見上げた。

「君」といたエデンはここからは見えないけれど。

それでも「君」があ頃の俺を待っていてくれるような気がした。

大気に溶けて俺に手を差し出す「君」。

俺はあ頃の「俺」の気持ちを吐きだすように大きく息をつく。

そうすれば「俺」も大気に還れるんじゃないかと思って。

そして、雪のもとへ行く。

タダイマ、と声をかけながら。

風がすべてを吹き飛ばしたかのように俺の心はすっかりとした。

きっとここから今の俺の恋は始まるのだろう。

最終話（後書き）

ここまでお読みいただき、ありがとうございます。
お話を書くのって難しいですね。

気になる和葉と雪の今後については機会がありましたらまた投稿させていただきたいと思っています。

お付き合いいただき、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0891e/>

blue sky

2011年1月28日02時17分発行